

美術館ニユース

国立エルミタージュ美術館所蔵
皇帝の愛したガラス
 2011年10月1日(土)～11月6日(日)



蝶番のある錫製蓋付手付
 ジョッキ・ボヘミア



巡礼者用の水筒・南ドイツ(?)



「ウェッジウッド様式」の磁器製台座を
 もつ4本の蠟燭用枝付燭台・西ヨーロッパ

ロシア国立エルミタージュ美術館は、イギリスの大英博物館やフランスのルーブル美術館などと並ぶ世界屈指の美術館です。その膨大なコレクションの数々は、これまでもさまざまな展覧会を通して我が国に紹介されてきました。当館におきましてもエルミタージュ美術館名品展として1991年に「ヨーロッパの風俗画」展、1995年に「水の情景」展を開催し、ヨーロッパ絵画の優品を展覧しました。そのエルミタージュ美術館に2000点を超える大変質の高い優れたガラスのコレクションがあることは、あまり知られていないのではないのでしょうか。このたびの展覧会は、歴代の皇帝や貴族たちによって集められたヨーロッパ各国のガラスと女帝エカテリーナ二世以後、国家的なプロジェクトとして生み出されたロシア国産のガラスを取り上げます。

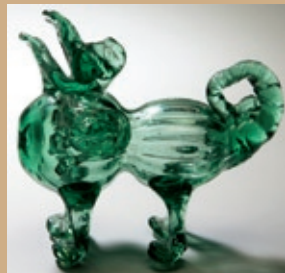
展覧会は三章から構成されていて、まず、第一章「ルネサンスからバロックの時代へ」では、15世紀末から18世紀初頭のヴェネツィアの繊細で華麗なレースグラスや、16世紀から18世紀にかけてのボヘミア、ドイツ、フランスのガラス—これらのガラスは寓話に満ちた色鮮やかな絵で飾られ、ヴェネツィアのガラスとは全く趣を異にします—、そして17世紀から18世紀のスペインのガラスを紹介し、第二章「ヨーロッパ諸国の華麗なる競演」では、19世紀に至って各国の技巧を凝らし洗練を極めたガラス、モザイクやビーズ製品、装飾品の数々、そして19世紀後半から20世紀初頭にかけて東洋の影響を受けて美しく変貌を遂げたアール・ヌーヴォー、アール・デコのガラスをご覧ください。ここには日本でも人気の高いエミール・ガレやドーム兄弟、ルネ・ラリックの作品もあります。そして第三章「ロマノフ王朝の威光—ロシアのガラス(18世紀～20世紀)」は、他地域の進んだ技術を吸収し、ロシア国内において皇帝たちのために創られた優美なロシアガラスを取り上げます。いずれの作品も歴代の皇帝や皇后、貴族たちが身近に置いたことがわかる出自や来歴が明らかな優品ばかりです。この秋、輝くガラスの美をお楽しみください。【学芸員 福富 幸】



花器・イギリス



鉢・ヴェネツィア



「犬」の像・スペイン

"Glasses Admired by the Russian Tsars"
 History of European and Russian glass from the collection of the Hermitage



広瀬臺山「滝見美人図」

刊行物のご案内

①「『岡山の美術』小野竹喬・森谷南人子・稲葉春生・池田遙邨」

■県内の中学校、高校、大学の図書館に配布 ■当館にて500円で販売中



②「岡山県立美術館紀要 第3号」

目次
 妹尾克己・・・坂田一男「草画 オワーズ河漫筆」と「草画スケッチ パリ落書」を巡って
 福富 幸・・・報告 特別展示「もっと伝統工芸 技と美の出会い」について
 橋村直樹・・・「最高の画家」カリエルギス：奉獻銘文における賛辞表現をめぐって
 山吹知子・・・イサム・ノグチの「ユネスコ本部の庭園」に関する考察
 岡本裕子・・・美術館と学校の連携活性化事業—平成22年度の取り組み—
 (平成22年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業、2010年度美
 連協美術館活動助成(美術館事業))



■県内の図書館および、全国の主要美術館に配布 ■販売はしていません

③「平成22年度岡山県立美術館年報」

■県内の図書館および、全国の主要美術館に配布 ■販売はしていません



「国立エルミタージュ美術館所蔵 皇帝の愛したガラス」展	関連事業
記念講演会	「珠玉のガラス芸術—国立エルミタージュ美術館からの贈り物」 講師：水田順子氏(本展監修者：北海道立近代美術館学芸部長) 日時：10月8日(土) 14:00～15:30
ワークショップ	「ガラスで遊ぼう」 日時：①10月15日(土)／②16日(日) 各13:30～15:30 講師：渡邊茉莉子氏 協力：倉敷芸術科学大学 ①.②.③ 日時：③10月29日(土) 10:30～12:00／13:30～15:00 講師：当館職員
美術のタベ	「国立エルミタージュ美術館所蔵 皇帝の愛したガラス」展をみる 日時：10月28日(金) 18:00～19:00 講師：福富 幸(当館学芸員)

平成23年度 展覧会スケジュール(9月～12月)		
特別展	国立エルミタージュ美術館所蔵 皇帝の愛したガラス 第58回日本伝統工芸展岡山展	10月1日(土)～11月6日(日) 11月17日(木)～12月4日(日)
岡山の美術展	没後30年 森谷南人子 山崎治雄の写真 第1回 岡山の仏像 山崎治雄の写真 第2回 岡山における蘭草の栽培 日本伝統工芸展関連事業 もっと伝統工芸「金工」展 第2回I氏賞展	8月26日(金)～10月10日(月・祝) 8月26日(金)～10月10日(月・祝) 10月12日(水)～11月13日(日) 11月17日(木)～12月18日(日) 11月17日(木)～12月18日(日)

編集後記

美術館ニュース94号をお届けします。7月から始まった、「京都 細見美術館 琳派・若冲と雅の世界」展は、日本美術の優美さや大胆さに触れられる華麗な展覧会でした。次回開催のエルミタージュ美術館所蔵のガラス展は、ヨーロッパ各国のガラスなど、光り輝く魅惑のガラス世界をご堪能していただける展覧会となっています。県美初のシャンデリアも予定しておりますので、この秋は美しいガラスたちに恋をしてみるのはいかがでしょうか。【OM】

美術館ニュース 第94号
 発行：2011年9月
 発行者：岡山県立美術館
 〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
 TEL：086-225-4800
 E-Mail kenbi@pref.okayama.lg.jp

第58回 日本伝統工芸展岡山展 [11月17日(木)~12月4日(日)]

同時開催 第40回伝統工芸 日本金工展 [11月17日(木)~12月18日(日)]

毎年秋に開催される日本伝統工芸展は、日本の優れた伝統工芸技術の継承と発展を目的とした工芸部門においては日本最大規模の公募展です。全国から2000点以上の応募があり、600点あまりの作品が入選、岡山展ではその中から約290点を展示します。また今年は「金工」をクローズアップして特別展示とワークショップを行います。

展覧会に合わせて、伝統工芸を次世代に伝えたいの思いから、日本工芸会中国支部に所属する作家の方々と一緒にさまざまな普及活動にも取り組んでいます。そのひとつに「小学校出張講座」があります。展覧会に先立ち、県内の小学校へ出向き、伝統工芸についてのレクチャーと体験ワークショップを行います。人気が高いのはやはり備前焼で、備前焼ができるまでのビデオを見た後、手びねりで茶碗や湯呑みを作ります。子どもたちはなめらかな土の感触が心地よいのか、夢中になって取り組みます。高台の削りと焼成は作家にお願いし、できあがったものを展覧会でお披露目しています。これまでに備前焼の他、卒業記念に家族へプレゼントすると作った七宝のキーホルダー、タマネギの皮で染めた巾着袋など、七宝、染織、人形、漆芸と行いました。小学生が2時間ほどで体験できることは限られていますが、たとえ短い時間であっても自分で「やった」という記憶が残ることが大きいと考えています。今年からは出張講座に加え、子どもたちにぜひ展覧会を見てもらいたいと、小学校から美術館までの交通費を助成する事業も立ち上げます。「きれいだな」「すごいな」という感動を分かち合いたいと思います。子どもたちが大人になった時、作家にはならなくても、伝統工芸に親しみを持って需要者、支援者になってくれるのではないかと心ひそかに願っています。



昨年の実施例

【学芸員 福富 幸】

福武コレクションによる国吉康雄展を振り返って



国吉展会場風景

7月15日から8月21日まで開催された特別陳列「福武コレクションによる国吉康雄展」が無事に終了した。この展覧会は、2003年4月以来当館で寄託を受けている、福武總一郎氏所蔵の国吉康雄作品および関連資料571点からなる「福武コレクション」の中から、油彩画、ドローイング、版画、写真作品、遺品など310点を展示するものであった。これまで当館では、「福武コレクション」について、2003年の寄託記念展や2006年の特別展「国吉康雄展」、また常設展において折に触れて展示してきた。しかしながら、国吉康雄の油彩画や版画、遺品など多様なジャンルを包含する「福武コレクション」だけを一举に展示する機会はこれまでなかった。そこで「福武コレクション」だけからなる展覧会を開催することでそのボリュームと多様性、そして重要性を明らかにし、国吉康雄の生涯と創作活動を改めて紹介しようと試みたのである。展示の章立ては、写真作品だけの章を除き、作品ジャンルごとではなく、ほぼ時系列に沿って作品を振り分けて行った。先述のように、「福武コレクション」は多様なジャンルからなり、さらに国吉の初期から晩年に至る作品をまんべんなく含むため、時系列に沿った展示が最も適していると思われたからである。結果として、国吉の生涯と作品世界を広く俯瞰することが出来るると同時に、多様なジャンルからなるボリュームある「福武コレクション」の特徴が明らかになる展示空間となったのではないだろうか。

このように「福武コレクション」の全ジャンルをカバーする310点を展示することが出来たという点に注目するならば、開催目的の一つは達成されたと言ってもよいだろう。しかし同時に、300点以上の作品数は、ゆっくり鑑賞するにはいくぶん多すぎる感があることは否めず、もっと点数を絞るべきであったと展覧会担当者として反省しているところである。

【学芸員 橋村直樹】

I氏賞とその受賞展について

現代美術という分野には、そこでの活躍を志す若手作家のための「登竜門」がいくつも存在する。海外ではターナー賞やデュシャン賞がその最も著名な例であり、さらにはベネツィア・ビエンナーレやウィットニー・アメリカ美術館でのビエンナーレへの参加も、この世界における飛躍の契機として十二分に機能している。かたや日本でもVOCA賞や岡本太郎現代美術賞など数多くの賞が設けられているが、近年では妻有トリエンナーレを端緒に、昨年開催された瀬戸内国際芸術祭や今まさに開催中の横浜トリエンナーレなど、作家の知名度の向上に貢献する現代美術の祭典が国内でも増えつつある。これらは現代美術による地域への柔軟な提案が評価されてのことであり、こうして現代美術が根付いていく姿は一見に値するだろう。

さて、そんな登竜門が岡山にもあるのをご存知だろうか。それがI氏賞である。同賞は、「I氏」こと岡山県高梁市(旧成羽町)出身の伊藤謙介氏から、「岡山県ゆかりの若手美術家のために役立てて欲しい」と頂いた寄附金に端を発している。その寄附金を原資に県が設置した基金によって運営されており、年に一度、岡山県ゆかりの新進気鋭の美術作家を対象に、大賞が一名、奨励賞が二名選ばれる。

この賞の個性的な点として、まず一次選考で選出された作家が実作品を展示し、審査員がそれらを実見して受賞賞が決定されること、さらにその後の活動の成果を発表する場としてここ県立美術館の展示室が後年に提供されること、の二点が挙げられる。設立されてすでに五年になるが、昨年秋に開催された第一・二回の大賞受賞者の大西伸明・杉浦慶太両氏の展示は、両者の近作と最新作が揃った刺激的な内容となり、同時に制作された冊子とともに、作家の今後の全国的な活躍の契機となるよう囑望されるものであった。

来たる11月には第二回I氏賞展として、奨励賞受賞作家四名が一堂に会する。それぞれ全く異なる分野での活躍を続ける作家たちの最新の表現に、ぜひご期待頂きたい。

【学芸員 高嶋雄一郎】

第二回I氏賞受賞作家展「あたらしいかたちをもとめて」 会期/2011年11月17日(木)~12月18日(日) 主催/岡山県、岡山県立美術館

I氏賞紹介ページ：<http://www.pref.okayama.jp/page/detail-4014.html>

よそんちの展覧会

『桃源万歳！—東アジア理想郷の系譜』 (岡崎市美術館博物館 4月9日~5月22日)ほか



笠岡の夕景—古城山公園から撮影 海や空の水色と山や木々の緑色は、竹喬の作品に反映しているのかもしれない。

これまで体調を崩したが、4月頃から少しずつ積極的に展覧会を見た。『長沢芦雪 奇は新なり』(MIHO MUSEUM、3/12~6/5)では、無量寺所蔵の「龍図・虎図襖」が、本堂室中之間における位置関係を失わずに鑑賞できた。大原美術館では「群龍図」(絹本墨画)所蔵であることも分かった。『写真家・東松照明 全仕事』(名古屋市美術館、4/23~6/12)では、戦後初期の作品や、長崎、沖縄を取り上げた作品のほか、あまり紹介されない作品(海外の作品やスードなど)も見られた。長崎や沖縄などの章では、白黒とカラーの作品を割り付けており、その主題に対する写真家の息の長さが感じられる。『桃源万歳!—東アジア理想郷の系譜』(岡崎市美術館、4/9~5/22)では、中国、韓国から近世以降の日本における桃源郷絵画を紹介。4点の作品を海外の美術館から借用。日本の作家では、興謝蕪村、富岡鉄斎が紹介され、その後小川宇錢と小杉放菴へと進む、素晴らしい内容の展覧会。

『蘭漆 漆に刻む文様の美』(九州国立博物館、6/14~7/31)は、東京と九州の国立博物館所蔵品を中心とした宋元明の作品33点。漆層の美しさ、彫技のすばらしさ、文様の説明など解説が平明。『生誕100年記念 瑛九展』(宮崎県立美術館、7/16~8/28)では絵画と写真の代表作を紹介しつつ、絵画、版画の作品をもとに生まれた写真の作品を展示している点が興味深かった。回顧展としても面白かった。本展は埼玉県立近代美術館とうらわ美術館に巡回(9/10~11/6)。

【学芸員 廣瀬就久】

ワークショップ

「アクション・ライト・ドローイング」の中でおこった"こと"

7月29日(金)に浅見俊哉氏(アーティスト)を講師にお迎えし、ペンライトを動かしたり、電飾をつけて動くことで空間に「光の絵」をつくるワークショップを行いました。ワークショップの中でおこった"こと"を今回は簡単にまとめてみます。

- 今まで慣れ親しんだ描画材から離れ、光という新しい描画材との出会いによって、他者と個人の関わりの中から「こと(=制作をして作品をつくる)」が生まれた。
- じっとしては(その場に座って手と頭を使うだけでは)作品は生まれない。運動量に比例して、またより多くの他者と関わることで、作品に多様な可能性が生まれた。
- 個人が他者との関わりの中で「こと(=制作をして作品をつくる)」をおこすために、他者の思いや作品の全体像をイメージしながら、個人が主体的に、また客観的視野に立って行動を起こすことで、よりダイナミックな「こと(=制作をして作品をつくる)」が生まれた。

「こと」については、参加者の感想の中からもうかがえるので最後に紹介します。

「写真や光は撮るもの、照らすものだと思っていたけど、体につけて動いてみると、面白くてきれいです。家でもやってみたいです」(小学校2年生)

「大きな動作や速い動きをするとききれいな模様や形になって面白いなと思いました。たくさん動いたので楽しかったけど疲れました。他の人の作品をみるのも楽しかったです。大人やみんなに協力してもらえてよかったです。」(小学校6年生)

(※ワークショップの様子は、県美HPにて公開しています。)

【主任学芸員 岡本裕子】

『岡山の美術ハンディブック』(新書版) 6年間の歩み

苦節6年、1年に1冊発行してきたこの『岡山の美術ハンディブック』(新書版)も、なんとか無事に6冊目の完成にこぎつけました。2005年、当時の渡辺道夫副館長が特別予算を確保し、岡山の美術を紹介する新書版サイズの普及本を作ろうと発案。学芸課全員で分担執筆しハンディブック1号『岡山の美術 入門』(この号のみCD-R付き)が完成しました。1~5号までは「中高生のための」と冠が付いていましたが、学生さんのみならず広く一般の方々の入門書とすべく、今年からはそれをはずし『岡山の美術ハンディブック』としました。ここでこれまでの6冊を振り返ってみたいと思います。

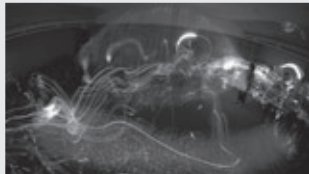
- ①2005年度「岡山の美術 入門」**
岡山ゆかりの古書画・日本画、洋画、工芸、彫刻、書、その他多彩な表現をジャンル毎にわかりやすく紹介。
- ②2006年度「もっと伝統工芸」**
当館所蔵工芸作品のほか、毎年開催している日本伝統工芸展にちなみ各部門毎の素材や技法について詳しく解説。
- ③2007年度「坂田一男と国吉康男」**
特別展「坂田一男展」(2006年開催)、「国吉康男展」(1990、2006年開催)で紹介した内容をベースに、2人の洋画家の画業をよりわかりやすく解説。
- ④2008年度「岡山の日本画 江戸時代から現代まで」**
江戸時代から現代までの岡山ゆかりの日本画家38人の作品を鑑賞し、また日本画の画材や技法など役立つ情報も合わせて掲載。
- ⑤2009年度「原田直次郎と赤松麟作」**
原田直次郎の貴重な作品「上野東照宮」が本館蔵となったのをきっかけに、原田の画業を、またこれまでなかなか紹介する機会がなかった赤松の所蔵作品100点のうちの一部を掲載。2人の洋画家の生涯と作品に迫る。
- ⑥2010年度「小野竹喬・森谷南人子・稲葉春生・池田遙輝」**
2009年は竹喬・南人子の、また2010年は春生の生誕120年記念の企画展示を開催した。ほぼ同時代を生き、自然の美しさをテーマに描き続けた4人の日本画家の画業を紹介。

以上の6冊は、当館受付にて各500円で販売中です。また県内の小・中・高等学校にも1冊ずつお届けしており、図書館等でも見ることもできるかもしれません。ご活用いただければ幸いです。

【主任学芸員 中村麻里子】



—電飾を体に装着中—



—参加者全員で「アクション・ライト・ドローイング」に挑戦—



ではないかと指摘している。臺山は、津山藩大坂蔵屋敷に生まれ、画は池大雅の門人で大坂画壇の重鎮福原五岳に学ぶ。二五歳の時家族とともに津山へ帰郷。一九歳で家督を継ぎ、三三歳で江戸定府を命ぜられ、還暦まで江戸で生活する。江戸暮らしの後半には関東の文人たちとの交流を深め、作品数も増えていく。六八歳で津山に戻ってからは、旧友を訪ねたり作画等に勤しんだりと悠々自適に過ごしたが、病を得て六三歳で亡くなった。

【主任学芸員 中村 麻里子】